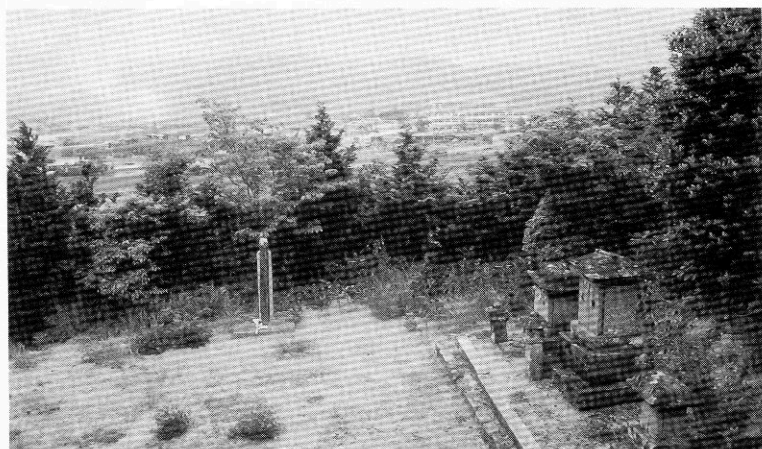


# ～日置町の歴史探訪③～

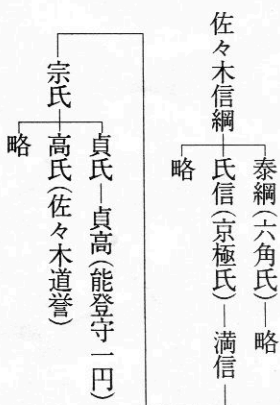
## 古城跡―下城



下城は町内一円にあつて上城に  
対し名付けられたものと考えられ  
るが「下一円城」とも「木戸の城」  
ともいわれている。

「城主は佐々木一族の縁ある  
一圓卿と申御方の居城にて村名  
にも稱し乗り候由申伝へ候へど  
も確かなる儀は相分り不申候」つ  
まり、一圓卿の居城と伝えている  
がよくわからないというのである。  
ではその一圓卿とはどんな人物な  
のか風土注進案によれば「佐々木  
道誉の御舎兄の流れの御子」とあ  
る。そこで先ず佐々木佐渡判官人  
道々誉であるが永仁四年（一二九  
六年）京都の高辻で生まれている。

系図



道誉は近江国（現滋賀県）をは  
じめ一時期は十四ヶ国の所領を持  
つ足利時代の実力者であった。甥  
の貞高が能登守一円と称し注進案  
による一圓卿その人であるのか、

或いは、能登守一円の直系の者が  
明らかではない。では、貞高（能  
登守一円氏）について考察し追跡  
してみたい。近江国一円荘（滋賀  
県犬上郡）を中心に実権を持つて  
おり佐々木一族の六角氏（本家）  
京極氏（分家）のうち京極氏に  
属している。

時は移り室町時代となり織田信  
長が全国制覇するにあたり近江国  
へ入国攻め入る際、貞高直系の  
一円山城守は六角氏、京極氏の間  
で進退に苦しみ土佐（高知県）へ  
逃れている。土佐では藩主山内一  
豊氏の庇護を受けており後に羽根  
城（高知県安芸郡）の城主となっ  
ているがそれは一円山城守の孫で  
一円但馬守である。

明治二十二年初代高知市長とな  
った一円正興氏はその後胤である。  
現在高知県で一円姓の人は十数人  
と聞く。

さて、前述のように下城は一圓  
卿との係りは定かでないが地名と  
して一円が残っている。因みに地  
名や因果関係について一円荘のあ  
った滋賀県犬上郡多賀町・甲良町  
を調査したが両町とも荘園支配の  
形態から一圓卿の關係からか不  
明であった（多賀町に一円という  
地名あり）。

城山は一円町道より五十メートル

ル登った里山で頂上に大小四基の  
石祠と遺構もあり、更に城山よ  
り東方百数十メートルの位置に地  
区の共同墓地があり、その一角に  
一圓卿の墓と伝えられている五輪  
塔がある。仮りに、城主の墓碑と  
すれば鎌倉時代の後期、地方に現  
存しているそれらに比較して（向  
津具二尊院等）少々貧弱に思われ  
る。また、上城と下城の合戦云々  
についての伝説もあるが時代錯誤  
もあり考えにくい。

鎌倉、室町、戦国時代といわれ  
る十二世紀から十六世紀初期にか  
けての城は山城であつて国人衆と  
いわれる地方豪族若しくはそれよ  
り更に狭い地域の実力者の城は物  
見櫓を兼ねた建物であつたと考  
えられる。山頂に砦を造り下方  
に居館を構えていたのであろう。

今日見る堅固で荘厳な城は安  
土・桃山時代といわれた十六世紀  
中期以降にその姿をみる。（現存  
の城は当時の城を復元した昭和築  
城が多い）

いずれにしても一圓卿が近江国  
周辺を本拠地としながら何故に長  
門国の当地方に關係を持ったのか、  
今の処知ることは出来ない。然し  
謎を追う夢もよいのではと思う。

執筆 岡藤 正作